# 5. モラエス受容における正宗白鳥と志賀直哉

## ── 日本の文学者におけるモラエス受容（3）──

河田和子

### １、はじめに

ヴェンセスラウ・デ・モラエス（Wenceslau José de Sousa de Morais 1854年5月30日～1929年7月1日）は、日本研究家としてラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn 1850年6月27日～1904〈明治37〉年9月26日）[1]とともにその名が挙げられてきた。日本の文学者や文化人らがモラエスに注目するようになったのは没後、特に昭和 10〈1935〉年の七回忌法要が契機になっている。この時期からモラエス顕彰において大きな役割を果たしたのがモラエス研究家・翻訳者の花野富蔵である。花野の翻訳やモラエスに関する文章を読んでモラエスに関心を持った文学者も多い。

戦前、花野のモラエス関連の翻訳や著作（紹介記事、評伝など）が日本の文学者のモラエス受容に影響していることは、拙論「戦前のモラエス受容における花野富蔵と佐藤春夫 ── 日本の文学者におけるモラエス受容（２）──」[2]でも佐藤春夫との関わりから検証してきた。佐藤の場合、日本の伝統的な文学を顧みる一契機としてモラエスに関心を持ち、その媒介者として花野富蔵の影響もあったのだが、昭和 12〈1937〉年後半以降、また戦後もモラエスや花野に関して言及したものはない。それは佐藤の関心が日本の伝統的な文学、古典の方に傾斜していき、モラエスへの興味が薄れていったからだが、戦前モラエスに対する関心を示していた文学者で、戦後もその関心を保持していた作家（花野はモラエス研究家なので除く）は余り多くない。本稿の最後に参考として付した「日本の文学者における〈モラエスもの〉一覧：大正14年～モラエス全集刊行迄」は、戦前から戦後にかけてモラエスに言及した文学者の作品を調査し、年代順に整理して作成したものであるが、戦前・戦後モラエスに言及しているのは貴司山治と正宗白鳥くらいである。ただし、志賀直哉のように戦前モラエスに関心を持っていてそのことを戦後の作品で書いている文学者もいる。戦前・戦後を通してモラエスに対する関心を持っていた作家として志賀も含めてよかろう。貴司に関しては拙論「貴司山治におけるモラエスの影響 ── 日本の文学者におけるモラエス受容 ──」[3]で論じたのでここでは触れず、正宗白鳥と志賀直哉に注目したい。

作風は異なるが、白鳥と志賀は自己の体験に基づいて小説を書くタイプの作家である。彼らがモラエスを知るきっかけも花野のモラエス関連の著作（紹介記事）を読んだことが契機となっている。特に花野がモラエスについて紹介する際、ラフカディオ・ハーンとの対比で述べることが多いが、白鳥も志賀もハーンの愛読者であった点など共通する所も少なくない。そこで本稿では正宗白鳥と志賀直哉に焦点を当て、それぞれの作品においてモ

ラエスがどのように受容されていたのか、花野富蔵の影響も考慮しながら検討する。

## ２、戦前の正宗白鳥とモラエスへの関心

正宗白鳥（明治 12〈1879〉年 3 月 3 日～昭和 37〈1962〉年 10 月 28 日）は、明治・大正から昭和期にかけて活躍した日本の小説家、劇作家、文学評論家である。自然主義文学の代表的作家の一人だが、まずその経歴や作風について触れておく必要があろう。

写真:昭和 35 年 9 月 3 日 NHK 長崎にて『正宗白鳥全集』第 28 巻（福武書店、昭和 59〈1984〉年 9 月）

岡山県和気郡（現・備前市）の旧家に生まれ、本名は忠夫、筆名の白鳥（はくちょう）は、母の生地・香川県東部の讃岐白鳥（さぬきしろとり）の名から取っている[4]。子供の時から成績は優秀だったが、病弱だったことが白鳥に現実嫌悪や人生の不安を植付けた。そうした傾向は「現実のかなたの世界への憧れと結びつい」て「海外を夢見る心が強かった」(高橋英夫「正宗白鳥・人と作品」)[5]ことと繋がっていると見られる。

明治 29〈1896〉年に上京して東京専門学校（早稲田大学の前身）英語専修科に入学、明治 34〈1901〉年に同校の文学科を卒業する。学生時代、白鳥は基督教に親しみ、植村正久牧師の説教を聴きに行き内村鑑三にも心酔していたが、次第に基督教に飽き足らぬ思いを抱くようになる。白鳥の関心は文学の方に向き、卒業する頃には基督教から離れていた。母校附属の出版部に就職した後、白鳥は明治 36〈1903〉年に読売新聞社に入社し、学芸欄で美術・演劇・文芸等の批評を担当した。新聞社に勤めながら小説も書き、創作活動を行っていたのだが、明治 43〈1910〉年に退社。自然主義文学の拠点と見なされることを嫌った新社長の婉曲な退社勧告を受けてのことだった(その後白鳥は作家として『読売新聞』に文章を寄稿している)。

その頃白鳥はすでに自然主義文学の作家として第一線に立っており、明治 40〈1907〉年 2 月に小説「塵埃」を書き、翌年「何処へ」を発表し島崎藤村、国木田独歩、田山花袋といった自然主義文学者に続く小説家として注目されていた。白鳥はニヒリズムの作家としてのイメージが強く、白鳥作品に見られる「厭世と幻滅と倦怠の底に棲む冷たいシニシズムはなかば畏れられなかば敬された」(「正宗白鳥」解説・山本健吉)[6]。しかし、白鳥の中では「冷ややかで無感動な自然主義と限りなく精神をもやし続けるロマンティシズムとは完全に溶解しきれない」（高橋英夫「正宗白鳥・人と作品」）[7]まま矛盾した形で共存していたと見られる。即ち、ロマンティシズムとニヒリズムの現実主義とが矛盾したまま白鳥の中に存在していて（それは基督教をめぐる信仰と懐疑にも繋がる)、こうした傾向は戦前戦後を通して白鳥の作品に見て取れる。

白鳥には、戦前から戦後にかけてモラエスに言及した作品がある。モラエスを知ったの

は七回忌法要の頃、「モラエスと魯迅」（『読売新聞』昭和 10〈1935〉年 7 月 20 日夕刊、『予が一日一題』人文書院、昭和 13〈1938〉年 12 月に収録）を書いており、戦後は「心の故郷」（『朝日新聞』昭和 35〈1960〉年 1 月 4 日）において、徳島のモラエスの墓を訪れた時の印象や感慨を記している。白鳥はモラエスをどのように受容していたのか。

『読売新聞』昭和 10〈1935〉年 7 月 20 日夕刊に寄稿した「モラエスと魯迅」[8]で、白鳥は次のように書いていた。

> 世に隠れて徳島で晩年を過したポルトガル人モラエスの生涯は、私の心を惹く。その日本に関するさまゞな著作が、原語に熟通する能文の士によつて翻訳されることを望んでゐる。彼れは、ハーンほどの文学才能はなかつたにしても、その奇人としての生活振りは、一層堂に入つてゐたと思はれる。日本女に愛着し、彼女の死後もその面影を追慕しながら、徳島のやうな僻地に、徹底した孤独な生涯を過したことは、常人の敢へてし得ざるところである。ハーンにしろ、モラエスにしろ、日本に於いて恣（ほしいまま）に彼等の夢を楽み得られたのは幸福であつた。日本が彼等に感謝すべきよりも、彼等こそ日本に感謝すべきである。／現実を無視して自分の夢に耽り得られる文学者は幸ひである。異郷の土地と人とを自分の好みに適したやうに芸術化して、安んじてそこに身を置いてゐられゝば幸ひである[9]（傍線は引用者による、以下同じ）。

白鳥がハーンとモラエスを並べて「日本が彼等に感謝すべきよりも、彼等こそ日本に感謝すべき」とコメントしたのは、花野富蔵の「日本文化の貢献者　モラエス七回忌」（『読売新聞』昭和 10〈1935〉年 6 月 30 日）に目を通してのことだろう。この紹介記事の五日前、第一書房から花野訳『日本精神』も刊行されている。花野の「日本文化の貢献者」では、モラエスの日本への愛情とその功績を知ってもらう為、次のように「日本人の恩人」であることが強調されていた。

> 頑くななほど名を嫌つて、人との交際を求めようとしなかつたからだつた。だから、その芸術的価値も知られなければ、日本人の恩人だとも知られないのだつた。――日本と日本人とへの深い愛情を十幾冊の文学作品に溶かしこんで、その精髄をポルトガルとブラジルとの国民に宣揚してくれた恩人だと知るものがなかつたのだ。しかも、その深い愛情は結局、片想ひに終つて、寂しさの果てに、遂に、敷石の上に頭を投げて痛ましい最期を遂げたのだつた。（略）モラエスが第二の小泉八雲といはれる所以は、むろんその内容から来てゐるので、何よりも八雲に深く傾倒し、自ら第二の八雲たるを任じてゐたほどなのだ[10]。

白鳥が「モラエスと魯迅」で「ハーンほどの文学才能はなかつたにしても」と書いたのは、花野がハーンと対比して「作家としても、さほど驚嘆に値すべき文士ではないかもしれぬ」

が、「モラエスが第二の小泉八雲といはれる所以は、むろんその内容から来てゐる」と紹介していたことに基づく。白鳥はハーンの愛読者だったから、花野がモラエスを「第二の小泉八雲」として紹介したことで関心を持つようになったのである。「その日本に関するさまぐな著作が、原語に熟通する能文の士によつて翻訳されることを望んでゐる」と白鳥が書いたのも、『日本精神』の翻訳者・花野に向けたエールだろう。

ただし、ハーンと同じくモラエスも「現実を無視して自分の夢に耽り得られる文学者」だというのは白鳥自身の見方である。二年前、白鳥は「ラフカディオ・ハーンの再評価」(『国際評論』昭和 8〈1933〉年 9 月、日本外事協会）で、次のように書いていた。

> 旧日本も、本当は、ハーンが空想したやうな『蓬莱』ではなかつたのだ。（略）現実の社会は、仙境とは全く趣きを異にしてゐるに極まつてゐる。たゞ詩人ハーンは、偶然この異国に到着して、自分自身で恣まゝに夢を描いて楽んだ。（略）有らん限りの好意を寄せて、日本及び日本人を描いて、世界に示したのは、漫遊者の浅薄な観察によつて誤解され、侮蔑され勝ちの日本のために、幸福であつたが、ハーン自身も、日本に来た為めに、安定した生活を営み、自己の天才を充分に発揮することが出来たのは、幸福であつた。日本がハーンに感謝すると共に、ハーンも日本に感謝していゝのである[11]。

白鳥は「日本がハーンに感謝すると共に、ハーンも日本に感謝していゝ」と書いたのと似た調子で、日本に異国情緒の夢を描いていたハーンとモラエスを並べて「日本が彼等に感謝すべきよりも、彼等こそ日本に感謝すべき」だと書いている。「日本が彼等に感謝すべきよりも」と書いたのは、ハーンとともにモラエスを「日本人の恩人」とする花野の見方が前提にあってのことである。

けれども、ハーンとの接点からモラエスに興味を持っただけなら一時的な関心に留まり、戦後モラエスの墓がある徳島の潮音寺の墓地を訪れることまでしなかっただろう。留意したいのは、白鳥の心を惹いたのは、モラエスの堂に入った「奇人としての生活振り」で、徳島に隠棲し「徹底した孤独な生涯」をおくった点だったことである。その点でハーンとも異なるが、白鳥も厭世的だっただけに共鳴する所があったのだろう。白鳥が四国を旅した際、モラエスの墓を訪れたのもそのことと関わっている。

### ３、戦後の徳島来訪と〈心の故郷〉

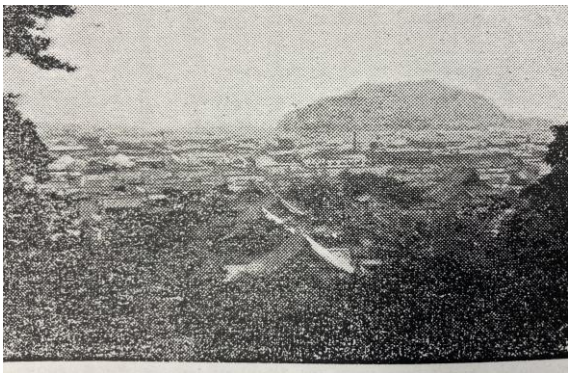
昭和 34〈1959〉年 11 月、白鳥は四国を旅行して徳島を訪れた際、潮音寺の墓地にあるモラエスの墓に参っている。『朝日新聞』昭和 35〈1960〉年 1 月 4 日の朝刊に発表した「心の故郷」にはその時の体験と所感が書かれており、次のように徳島の印象も記されている。

> 私は先ごろ、秋たけなはな日本的好季節に、九州四国方面に短時日の旅行をしたが、

阿波の徳島で、ポルトガルの文学者モラエスの墓を訪ねた。軍人であり外交官でもあつた彼は、神戸の領事館に勤めてゐた時分に親しんだ女性に心惹かれて、彼女の故郷の徳島に転住したのである。徳島は、かねて特異の地方色のあるゐなか町であると、私はかねて空想してゐたのであるが、今度はじめて来て見ると、有り振れた凡庸な土地であつた。戦災後に復興されたので、他の都市と同様に東京や大阪の市街の模倣みたいであるが、戦災前だつて、なんの面白味もないやうに推測された[12]。

先ごろというのは昭和 34〈1959〉年 11 月上旬、母の故郷である讃岐琴平（香川県東部）から高知、徳島をまわった時のことを指す。白鳥は旅先の讃岐琴平から妻宛てに「急に思立ち（金ピン宮）に来る、夜甚かゆくて異状を覚えしが、今朝は回復、千三百六十段の石段を上り参詣、天気快晴、（略）これから高知へ行き徳島に廻るつもり」（昭和 34〈1959〉年 11 月 8 日正宗つ祢宛書簡）[13]と手紙も書き送っていた。白鳥は当時 80 歳、他界する三年前だが、金刀比羅宮の「千三百六十段の石段」（正確には千三百六十八段）を上がって参詣したというから健脚だったのだろう。

白鳥がモラエスの墓を訪ねたのも、花野富蔵の「日本人モラエス――阿波の辺土に死去して三十年――」（『別冊 週刊朝日』朝日新聞社、昭和 33〈1958〉年 7 月）に触発されたものと考えられる。花野の「日本人モラエス」には、「潮音寺の墓地」という見出しでモラエスが亡き妻・おヨネと小春の墓参りをしていたことが記されており、墓地を逍遙しているモラエスの姿も次のように小説風に書かれていた。


眉山から望んだ美しい徳島の市街，中央の小山は旧城内の城山

ある秋、モラエスは墓参をすました後暫く墓地を逍遙していた。ふと一つの小さい墓石の上に眼をとめたとき、彼はうずくまって動かなくなった。／よほど古い墓で、彫（きざ）まれた文字がなかばくち果てているその墓の表面に蔓草が纏いついて、すでに青葉が二、三残っているだけだった。眺めているうちに、その蔓草の優しい行為がモラエスにわかって、いじらしくなった[14]。

妻の墓参りの後、墓地を逍遙しているモラエスの様子が想像して描かれており、同頁（148 頁）には「眉山から望んだ美しい徳島の市街」の写真（左上写真）も載っている。白鳥は『別冊 週刊朝日』に掲載された花野の「日本人モラエス」を読んで、再びモラエスに対する関心と徳島の町への興味を持ち、四国をまわる際、潮音寺の墓地にあるモラエスの墓を訪ねようと考えたのだろう。しかし、モラエスが愛好した眉山をはじめ、戦災後に復興された徳島の市街を目の当たりにして、白鳥はありふれた凡庸な土地と見なし、辛口のコメント

をしている[15]。毒舌家の白鳥としては珍しくないが、徳島の町を酷評していたのは白鳥がモラエスの隠棲した徳島を「特異の地方色のあるゐなか町」だと「空想」し、そうした町並みを期待していたからである。

白鳥は潮音寺の墓所を尋ねた際、「モラエスさんはよく知つてゐ」るという老女に偶然会い案内してもらう。その案内人から聞いた話は「心の故郷」で次のように記されている。

> 私は、「白頭宮女在り。閑坐玄宗を語る」とかいふ、子供の時に読んだ古詩をおぼろに思ひ出した。モラエスは、大工の家の二階にひとり住ひをしていたが、それは戦災で焼失して跡形もなくなつてゐるさうだ。変な異人として、周囲の者にも親しまれず、西洋こじき呼はりされたりしてゐたさうだ。最近ケーブルカーの出来てゐる眉山といふ山を愛好してゐたと、老女は話してゐたが、私の見たところでは、眉山といふ山は、世界を知つてゐるモラエスなどが特に愛好するやうな、風趣ある山ではない。晩年には、出雲の松江へ転居しようと企ててゐたさうだが、私の察するところでは、それは、ラフカディオ・ハーンの松江の生活を羨望したためではなかつたか。あまりに老衰してゐたために、その移転も実現されず、便所通ひも出来ないやうな不自由な身で、孤独の生涯を過したのださうだ[16]。

案内人の老女からモラエスの在りし日の生活を聞きながら、白鳥は「白頭宮女在り」の古詩を想起している。この詩句は元稹、一説には王建の詩とされる「行宮」（行幸で旅先に設けた仮宮）の一節である。詩の全文は「寥落故行宮／宮花寂寞紅／白頭宮女在／閑坐説玄宗」であり、玄宗ゆかりの行宮が零落した様子や、かつて玄宗に侍り、今はかつての栄華の語り部として余生を生きる老宮女の存在が詠まれている[17]。白鳥がこの詩を想起したのも、「異郷の文豪の在りし日の生活をぽつぽつと語」る老女の語りと、玄宗の時代の栄華を語る「白頭宮女」のイメージが重なったからである。

この随筆でもハーンとの接点に触れており、モラエスが「出雲の松江へ転居しようと企て」たのは「ラフカディオ・ハーンの松江の生活を羨望したため」ではないかと推察している。そこに白鳥自身ハーンの松江の生活を偲んで旧宅を見に行った時の感慨も反映されている。昭和 8〈1933〉年 4 月、島根・松江を旅してハーンの旧宅を訪れた白鳥は「昔風の日本趣味から云ふと、風雅な住居」で松江も「田舎の小都会としては、最も風致が豊かであるやうに思はれる」（「ヘルンの旧居」、『新潮』昭和 8〈1933〉年 5 月）[18]と記していた。白鳥自身「出雲の松江に住んでみたいと思つたことがあつた」（「遊行記」、『一つの秘密』新潮社、昭和 37〈1962〉年 11 月 収録）[19]ことから、そうした白鳥の感慨が反映されており、モラエスの心境を想像しながら白鳥の晩年の心境も投影されている。

随筆のタイトルにもなっている〈心の故郷〉について、「夢幻裡の故郷」という言葉を用いながら、白鳥はモラエスについて次のように述べている。

私は旅行から帰つて来てモラエス文集の翻訳を読んで、心の真の故郷をも、からだの故郷をも失つた彼を想像するのである。カミユの戯曲（引用者注、『誤解』を指す）も現実の故郷に安んぜず、夢幻裡の故郷を憧憬しながら、つひに達し得なかつた心境の表現であるが、モラエスも、彼の生れ故郷のポルトガルは捨てたが、夢幻裡の故郷にはつひに安着することは出来なかつたのである[20]。

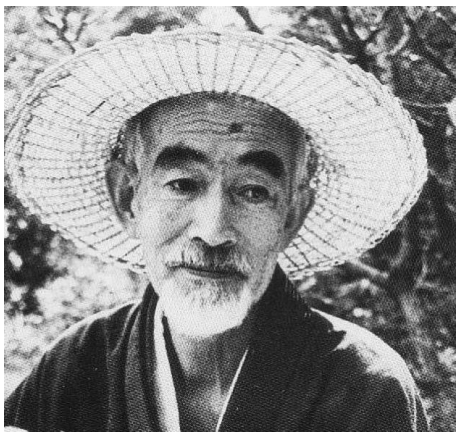
書名は挙げてないが、「モラエス文集の翻訳」とは花野富蔵訳『徳島の盆踊』（第一書房、昭和 10〈1935〉年 9 月）だろう。白鳥のいう〈心の故郷〉とは「夢幻裡の故郷」、想念上のものである。モラエスは、生まれ故郷（「からだの故郷」）のポルトガルを捨て、〈心の故郷〉を日本・徳島に求めた。白鳥は戦前、「モラエスと魯迅」で「現実を無視して自分の夢に耽り得られる文学者は幸ひ」（前出）だと述べていたが、この随筆では結局モラエスもその夢、即ち「夢幻裡の故郷」に安着出来なかったと捉えている。そのようにモラエスの心境を「想像」したのも、『徳島の盆踊』を読んでのことだろうが、白鳥自身〈心の故郷〉を求めるロマンチックな面を持ちなから、空想や夢の世界では安じることができぬリアリストだったからである。

「心の故郷」を発表する三年前、白鳥は近来夢の中でどこかの宿屋に泊まっていて汽車に乗るのに色々気にしているような夢をよく見るので「わが落着く場所の見つからないための焦慮の現れであるか」（「青春の夢を追ふ」、『日本経済新聞』昭和 32〈1957〉年 1 月 1 日）[21]と書いていた。それゆえ自らの心境と重ねて「夢幻裡の故郷」に安着出来なかった晩年のモラエスの心境に思いを馳せていたのだろう。モラエスの晩年について述べながら、白鳥自身の心境を投影させていた所があり、こうした受容のありようは志賀直哉にも見られる。そこで志賀がモラエスについてどのように言及していたのかを見ていく。

### ４、志賀直哉の四国旅行と花野富蔵のモラエス紹介記事

志賀直哉も戦前からモラエスに関心を持っていたが、白鳥とは異なり、モラエスに言及したのは戦後である。戦後の作品として、「稲村雑談」（『作品』昭和 23〈1948〉年 8 月、11 月、昭和 24〈1949〉年 3 月）と「盲亀浮木」（『新潮』昭和 38〈1963〉年 8 月）があり、いずれもモラエスに関わる不思議な夢（花野富蔵の来訪を予知するようなモラエスの夢）を見た戦前の体験が回想されている。また、昭和 41〈1966〉年 10 月に佃實夫の『わがモラエス伝』が刊行された際、単行本の帯の推薦文を書いたのが志賀だった。この推薦文は、佃による談話の筆記に志賀が目を通して加筆したもので、「日本人はモラエスを知らなさすぎるのではないか、もっと知られてもいい人であろう。佃実夫君のこの本の出版によって、日本人がモラエスを知るようになれば意義があると思う」（「佃実夫『わがモラエス伝』推薦」）[22]と書いている。『定本モラエス全集』全五巻が刊行されたのはその三年後、編集委員五人の筆頭に志賀も名を連ねている[23]。

志賀は戦前モラエスをどのように知ったのか。その経緯は戦後「盲亀浮木」で触れられているが、その前に志賀の経歴、小説家としての気質や作風について述べておく。志賀直哉（明治 16 年〈1883〉年 2 月 20 日～昭和 46〈1971〉年 10 月 21 日）は、宮城県牡鹿郡石巻町（現・石巻市住吉町）に生まれ、銀行員から実業家になった直治を父に持つ。二歳の時に東京に移り、学習院初等科・中等科・高等科を経て明治 39〈1906〉年に東京帝国大学に進学する。高等科の頃から小説の創作を志していた直哉は、明治 43〈1910〉年に武者小路実篤らと『白樺』を創刊し、その後大学を中退。『白樺』は文学雑誌であるとともに美術雑誌的な性格も強く、志賀は美術方面の芸術家、画家とも広く交流していた。代表作として長編『暗夜行路』（『改造』大正 10〈1921〉年 1 月～昭和 12〈1937〉年 4 月まで断続的に発表）が有名だが、志賀が〈小説の神様〉と称せられたのは、短編「小僧の神様」（『白樺』大正 9〈1920〉年 1 月）に由来する。織田作之助が「可能性の文学」（『改造』昭和 21〈1946〉年 12 月）で批判的に述べていたように、日本の文壇には「心境的私小説――例えば志賀直哉の小説を最高のものとする定説」[24]があった。〈小説の神様〉と称せられたのも、志賀の書くような作家自身を語る〈私小説〉、特に身辺雑記的な〈心境小説〉が正統派の小説と考えられていたことが関係している。



写真：昭和 27 年頃 熱海大洞台の寓居庭にて『志賀直哉全集』第 9 巻（岩波書店、平成 11〈1999〉年 8 月）

その志賀には執筆休止期が三回ある。最初は大正 3〈1914〉年～6〈1917〉年迄の三年間、二回目は昭和 4〈1929〉年～8〈1933〉年迄の足かけ五年間、三回目は昭和 17〈1942〉年～20〈1945〉年夏迄の太平洋戦争中だった。特に二回目は『暗夜行路』の休載期と重なっている。この休筆について、阿川弘之の『志賀直哉 上』（岩波書店、平成 6〈1994〉年 7 月）では、当時プロレタリア文学全盛期で「マルクス主義者でなくては原稿の注文なぞ来ないとの噂すら、一部文筆家の間で囁かれてゐた」が、「直哉はもともと、主義主張に則つて仕事をする気の無い人だし、かういふ風潮自体異質のもので、全く性に合わなかつた」ので、「日本文学の現況乃至出版界の現状に直哉が強い不満を抱いた」[25]のだとする。だが、そのプロレタリア文学も衰退し、志賀は五年にわたる沈黙を破って「万暦赤絵」（『中央公論』昭和 8〈1933〉年 9 月）を発表、『暗夜行路』の執筆も再開する。

志賀がモラエスを知ったのは二回目の休筆期の後、創作活動を再開した一年後であり、モラエスの七回忌法要の少し前だが、偶然花野富藏の「モラエスの著述 ― 紅毛日本人のシルエツト」（『伝記』昭和 9〈1934〉年 12 月　※1 日発行）を読んだことによる。志賀は昭和 9〈1934〉年 12 月 4 日から 10 日にかけて、小説家の里見弴と洋画家・山川清の三人で四国を旅行した。旅の直前、雑誌『伝記』に掲載された花野の文章を目にし、徳島に行くついでにモラエスの旧居も訪ねることを考えたのだが、その経緯については戦後「盲亀浮木」

で次のように回想されている。

> 私は数日前まではモラエスといふポルトガルの文人の事は全く知らなかつたが、此旅行に出る四五日前に送つて来た「伝記」といふ雑誌で偶然その名を知つて、丁度徳島へ行く事ではあり、伊賀町にあるといふ旧居を観てもいいと思つたのだ。モラエスはポルトガル人で、前には海軍軍人として極東に来航、その后(ご)、軍人を辞め、明治三十二年、神戸大阪の総領事として神戸に駐在、芸者お米と結婚、日本永住の決心をしたが、お米に死なれ、その姪の小春と再婚し、お米小春の郷里である徳島に隠棲した。そして、その小春にも死なれ、晩年は孤独な生活のうちに昭和四年、七十五歳で伊賀町の家で死んだ[26]。

志賀達は大阪の天保山から汽船で徳島に渡り、「徳島、鳴門、室戸岬、高知、それから山越えで道後に出、高松を最後に六泊の旅をした」(「盲亀浮木」)[27]。鳴門の渦潮を見た後阿波十郎兵衛屋敷に寄り、モラエスの旧居に行く予定だったが、志賀の体調が悪くなり、頭痛で旧居に行くことを断念。翌日は時間的に訪れる余裕がなく、自動車で室戸岬を廻り高知で旧友の画家・山脇信徳に会っている。結局モラエスの旧居を志賀は見ることなく、戦災によりその旧居は焼失した。

志賀は花野の「モラエスの著述」を読んだことがきっかけで、モラエスの存在を知り興味を持ったのだが、花野が「ラフカデイオ・ヘルン（小泉八雲）と比肩さるべき大先生」としてモラエスを次のように紹介していたことが呼び水となっている。

> ラフカデイオ・ヘルン（小泉八雲）が死んだのは一九〇四年、この文豪が日露戦争の結果を知らずに長逝したことは著名な話であるが、モラエスはそれを何物にも増して嘆いた。(略)オポルト発行の「日本での生活」の内容は、「日本よりの手紙」集で、一九〇二年より筆を記して、一九〇六年に至る日本事情の印象を刻々に故郷に通信したものである。ここにヘルンの後継者を以て自負してゐたモラエスの心底が解かるわけでヘルン没後以来の日本事情のレポーターとなつたのである[28]。

花野は「ヘルンの後継者」、「ヘルン没後以来の日本事情のレポーター」としてモラエスの経歴と著作について紹介していた。志賀もまたハーンの愛読者であり、「稲村雑談」(前出)に書かれているように「文章を書く上に一番参考になつたのはハーン」[29]だっただけに、ハーンの後継者を自負していたというモラエスに興味を持ったのである。花野の紹介記事を通してモラエスを知り、ハーンとの繋がりから関心を抱いた点で前述した白鳥とも共通している。

だが、志賀の場合、モラエスや花野富蔵に関することを書くのは戦後である。その当時、モラエスが注目されるようになる昭和 10 年代に書かれていてよさそうなものだが、志賀は

戦前モラエスや花野について何も記していない。日記等を見ても、モラエスや花野の来訪をうかがわせる記述は見当たらない。それは志賀の作家としての気質も関係しているように考える。昭和 10 年代、七回忌法要の前後から花野の著作（翻訳やモラエス関連の紹介記事・評伝等）が媒介となって、日本研究家としてのモラエスの存在やその著作が知られ、読まれるようになる。だが、〈日本的なもの〉の議論が盛んになる時期と連動して、日本精神の体現者、国粋主義者としてモラエスが称えられ、宣揚される風潮も高まっていく。前述したように、志賀は「主義主張に則つて仕事をする気のない」（阿川『志賀直哉』前出）作家だったからそうした風潮に違和感を持ち、モラエスに関わることは何も書かなかったのではないか。

とはいえ、戦前に体験したモラエスに関わる出来事を戦後に回想する形で書いたということは、モラエスへの関心が保持されていたことを表している。ならば志賀は、戦後「稲村雑談」や「盲亀浮木」でどのようにモラエスに言及していたのか。モラエスの予知夢の話が両作品で書かれていることの意味を考えながら見ていく。

## ５、戦後に書かれたモラエスの夢

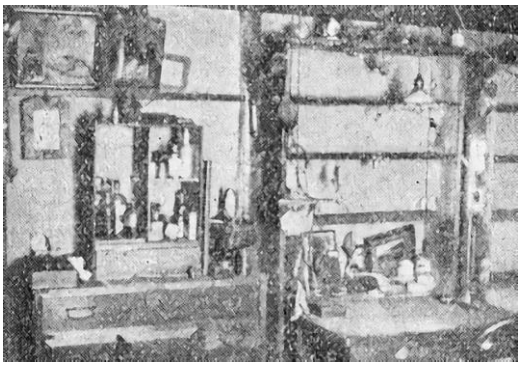
「稲村雑談」は、昭和 23〈1948〉年 5 月 14 日、熱海稲村（静岡県熱海市伊豆山）の志賀邸で小説家の広津和郎や『作品』（創芸社）の米山謙治・八木岡英治と雑談した時の速記を元に手を加えたものである。この随筆では「迷信について」という小見出しで、奈良に住んでいた時期、モラエスの夢を見てその一時間程後、偶然花野富蔵が舟木重信（独文学者、小説家）の紹介状を持って自宅に来たので驚いたという不思議な出来事が回想されている。志賀は迷信を信じないが、「夢で予知したり、今日、此人に途（みち）で屹度会ふと思ふと、会つたりした経験は度々」あり、「人間にさういふ能力のある事を信じて」[30]いるということで、その一例としてモラエスの予知夢のエピソードが述べられている。

同じエピソードは昭和 38〈1963〉年 8 月の『新潮』に発表した「盲亀浮木」にも書かれている。作者の不思議な体験を回想した随筆風の短編小説[31]で、モラエスの夢の内容が「稲村雑談」よりも詳しく次のように書かれている。

> この旅から二三年経つてからだったと思ふが、ある朝、私はモラエスの夢を見て眼を覚ました。（略）皇居前広場の松を想はせるやうな下枝を張つた背の低い松が所々に植ゑてあり、その外側を竹矢来で囲つてある。短袍（どてら）姿の大柄な年寄の西洋人が両手で矢来につかまり、頬髭顎髭を不精たらしく伸ばした顔を矢来に着けて、凝然（じつ）と中を覗いてゐる。それがモラエスだといふ事が私には分つてゐる、といふ、只それだけの夢である。尚、私は伊賀町にあるモラエスの家の中の光景を見てゐる。薄暗い六畳間の隅に幅三尺の仏壇があつて、人は誰もゐず、仏壇の灯明だけが明かるく点（とも）つてゐるといふ夢だ。（略）舟木重信君の紹介状を持つて訪ねて来た人がある。花野富蔵氏である。（略）花野氏はモラエスの研究家で、一度貴方をお訪ねしたいと云つ

てゐるので御紹介しますといふ文面だつた。私は不思議な気持になつた。今朝モラエスの夢を見て、起きて未だ一時間か一時間半しか経つてゐない時で、そんな話をしても初めて会ふ花野氏が信じてくれるかどうか分らぬやうな事だが、（略）花野氏はモラエスの姿も家の中の様子も何所か感じが似てゐるといつてくれた[32]。

この旅とは前に述べた四国の旅のことで、それから二、三年後ならば昭和 11〈1936〉年か 12〈1937〉年頃ということになろうが、こうした夢を見たのも先述した花野の「モラエスの著述 ― 紅毛日本人のシルエツト」を読んでいたからである。その紹介記事には「モラエスさんの外貌は幾度となく接したことのないものには絶対に想像もできないであらう」とあり、同頁に「晩年和服姿のモラエス」として不精髭を伸ばした写真が掲載されている（『伝記』前出、86 頁）。「徳島時代の書斎の一部」の写真（92 頁・左の写真）も掲載されており、「モラエスの姿も家の中の様子も何所か感じが似てゐる」と花野から言われたのは「モラエスの著作」を読んだ時の記憶や印象が夢に反映されていたからだろう。



この時期、志賀が「盲亀浮木」でモラエスの夢の話を書いたのは、モラエスの死を題材とした徳島出身の小説家・佃實夫の作品を読んでいたことも関係する。作中で「最近「ある異邦人の死」といふ佃実夫氏の小説を読み、その死も一種の自殺であつた事を知つた」[33]と述べている。「ある異邦人の死」（『新日本文学』昭和 34〈1959〉年 5 月、『別冊文芸春秋』昭和 34〈1959〉年 9 月に再掲）は、第 41 回芥川賞候補作になった短編である。その小説に刺激を受け、志賀は再びモラエスへの関心を喚起されたのである。

「盲亀浮木」で、志賀は「モラエスの話は偶然といふより心理的なもの」[34]だと述べている。モラエスの予知夢を「心理的なもの」と解しているのは、その不思議な出来事も無意識の問題と繋がっていると考えていたからだろう。「盲亀浮木」というタイトルの由来は、禅をやっていた志賀の叔父から聞いた言葉で、「百年に一度しか海面に首を出さないといふ盲亀」が「大洋を漂つてゐる浮木を求めて、百年目に海面に首を出したら、浮木に一つしかない穴の所から首を出したといふ、あり得べからざる事の実現する寓話」[35]に基づく。不思議な出来事も「仮りに偶然としても只偶然だけではなく、それに何かの力の加はつたもの」[36] ということで志賀は「盲亀浮木」という語を用い、その一例としてモラエスの予知夢のエピソードを述べているのだが、その力とは何か。志賀は「その何かとは一体なんだらうと思ふだけで、それ以上は考へられない」[37]とする。そもそも「盲亀浮木」は経典に由

来する用語であり、志賀もその仏法的なニュアンスは知っていた[38]。だが、宗教的な解釈をせず、日常的認識を超えた〈何か〉、モラエスの夢については無意識層にも関わる〈何か〉を感じ取っていた志賀の心境を表す形で「盲亀浮木」という語が用いられている。

このように、志賀の作品では花野の来訪を予知するようなモラエスの夢を見た不思議な体験を回想しながら、志賀の見方、心境を表す形で書かれている。「盲亀浮木」は身辺の出来事を調和のとれた筆致で描き、作者自身の心境を表している点で〈心境小説〉と言えるものである。こうした〈心境小説〉は、日本文学の特質を心理的な〈私〉の文学に見ていたモラエスの文学観にも通じる所があるように考えるが、それに関しては最後に触れたい。

## ６、おわりに　〈私〉の文学の接点

白鳥と志賀について、それぞれの作品をもとにモラエスがどのように言及されているか、その受容のありようについて検討してきた。両作家とも、モラエスについて知り関心を持ったきっかけは、新聞や雑誌で花野のモラエスに関わる紹介記事を読んだことにある。彼らはラフカディオ・ハーンの愛読者であっただけに、ハーンとの接点で紹介されていたことがモラエスに興味を持つ呼び水になっていた。白鳥の場合、戦前から戦後にかけてモラエスの受容の仕方は基本的に変わっておらず、志賀はモラエスについて述べるのは戦後になってからだが、戦前から関心があったからモラエスの出てくるような夢を見たのだろう。

しかし、モラエスの顕彰の仕方・捉え方は、戦前の七回忌以降と戦後とでは大きく変わっている。七回忌法要の頃からモラエスを日本精神の賛美者、国粋主義者として宣揚する論調が強くなり、特に太平洋戦争中「皇道の精髄を体現した日本賛美者として喧伝された一時期があった」（岡村多希子「戦前におけるモラエス顕彰」）[39]。それゆえ戦後、「モラエスが「戦争目的のためにねじ曲げられ、日本人の心理のファシズム化に利用され」たことを難じ、「モラエスの正しい姿を紹介したい」という思いから『定本モラエス全集』が刊行されたのだが[40]、戦前の国粋主義に対し「民主主義を伝統の作りなおしの問題として提起する」目論見もあり、「日本の庶民のなかで日本人同様にくらしたモラエス」というように戦後的な思潮の中で庶民的な面を強調して評価する[41]傾向もあった。花野の場合、モラエスの周知に努めていただけに時流に応じた形でモラエスを紹介していた所があったのだが[42]、本稿の最初で述べたように戦前・戦後を通じてモラエスに対する関心を保持していた文学者は余り多くない。モラエスへの関心が一時的なものだったからでもあろうが、モラエスの捉え方・顕彰の仕方が時代の趨勢により変化したことも関係していると考える。

そうした中、白鳥や志賀がモラエスに対する関心を保持していたのは、当時の思潮とは一線を引いた形でモラエスに関心を持っていたからだろう。モラエスに言及するにあたり両作家とも〈夢〉という言葉を用いていることにも留意したい。白鳥は、異国情緒の夢を抱いていたモラエスの晩年について、「夢幻裡の故郷」に安着できなかったことを述べながらそこに自らの心境も重ねていた。志賀の方は過去の不思議な体験としてモラエスの予知夢について回想し、偶然の出来事にも「心理的なもの」が関わっていると感じていた。〈夢〉

のニュアンスは異なるが、双方とも自己の心境や心理と結びつけてモラエスに言及しており、その点で白鳥と志賀のモラエス受容のありようは似ている。

花野は『徳島の盆踊』(第一書房、昭和 10〈1935〉年 9 月)の「あとがき」で、「個人が見、聞き、感じたことをそこはかとなく書きつらねて往くのが日本文学の本質だと断じ」、「日本文学は心理文学であり、「私」の文学でもあると喝破した」モラエスの日本文学観について触れ、「自分の「追慕」を綿々と物語るのに最も適合した文学的形式」を見いだしていたと解説している[43]。ここでいう「「私」の文学」とは日記や草紙類の他、『方丈記』や『徒然草』など古典の随筆文学も含むが、随筆に見られる心理的手法を用いてモラエスは亡妻を追慕した『徳島の盆踊』を書いていた。

白鳥や志賀も〈私〉の体験や心境、心理を反映させた文学＝私小説（志賀の場合、身辺雑記的な〈心境小説〉）を書いていた作家である。両作家の作風は異なるだけに、私小説の作家として一括りに出来ない所はあるが、日本文学の本質を心理的な「「私」の文学」に見ていたモラエスは、自己を語る小説や随筆を書いてきた白鳥や志賀にとって親近感の持てる日本研究家だったのではないか。モラエスは〈私〉の文学の接点を見いだせる異邦の文人だったのだと考える。

**【参考】日本の文学者における〈モラエスもの〉一覧：大正 14 年～モラエス全集刊行迄**

(1) 日本の文学者がモラエスに言及した作品と花野富蔵のモラエス関連の著作（翻訳、雑誌・新聞等に発表したモラエス紹介記事、評伝、小説、学術論文など）について、大正 14 年から昭和 44 年に『定本モラエス全集』全五巻が刊行されるまでのものを発表年代順に整理した。拙論「貴司山治におけるモラエスの影響 ― 日本の文学者におけるモラエス受容 ―」（前出）に付した「日本の文学者における〈モラエスもの〉一覧 戦前：大正 14 年～昭和 19 年」と拙論「戦前のモラエス受容における花野富蔵と佐藤春夫 ― 日本の文学者におけるモラエス受容（２） ―」（前出）に付した「花野富蔵のモラエス関連の著作リスト（『定本モラエス全集』刊行まで)」について資料を一部補足し、合わせて一覧にしたものである。

(2) 戦後の〈モラエスもの〉について、花野以外の文学者の作品は今回新たに追加した。新聞や日本近代文学関係の目録及び個人全集の索引、徳島県立文学書道館「文学企画展文学者の見たモラエス」（令和元〈2019〉年 11 月）等からモラエスに言及した文学者の作品（ジャーナリスト、一般人のものは除く）を調査し、確認できたものを挙げた。新聞記事は発表年月日と内容の全文を確認できたものを挙げており、今後調査を進める中で新たに確認できた資料は補足して別の機会に提示したい。なお、花野による翻訳書は他の著作と区別がつきやすいよう、☆印をつけてゴシック体で表記した。

大正 14 年〈1925〉

・**めがねさん**（貴司山治 ※伊藤好市の変名）「モラエスさん」（『婦人之世紀』16（9）

大正 14 年 12 月）

昭和 5 年〈1930〉

・**貴司山治**「文豪モラエス」（『新鋭文学叢書　暴露読本』改造社、昭和 5 年 11 月）
＊初出稿「モラエスさん」の内容に「附記」を加筆したもの

昭和 7 年〈1932〉

・**西崎満洲郎**「文豪モラエス翁を訪ねて」（佐藤信重・麻生恒太郎編『新興詩・随筆選集』詩と人生社、昭和 7 年 1 月）＊生田花世（小説家・詩人）の弟、夭逝した徳島の詩人

昭和 9 年〈1934〉

・花野富蔵「紅毛のニツポン人モライス」（『文芸』2(5) 改造社、昭和 9 年 5 月）
・花野富蔵「モラエスの著述 ― 紅毛日本人のシルエツト」（『伝記』1(3) 伝記学会、昭和 9 年 12 月）

昭和 10 年〈1935〉

・**新居格**「モラエスの七回忌に際して」（『徳島毎日新聞』昭和 10 年 5 月 14 日）
・**新居格**「モラエス忌の国際的意義」（『徳島毎日新聞』昭和 10 年 6 月 3 日）
**☆モラエス 著／花野富蔵 訳『日本精神』（第一書房、昭和 10 年 6 月 25 日）**
・**久野豊彦**「モラエス七年祭」（『報知新聞』昭和 10〈1935〉年 6 月 27～29 日）
・花野富蔵「日本文化への貢献者　モラエス七回忌」（『読売新聞』昭和 10 年 6 月 30 日）
・花野富蔵「モラエスと悟り」（『徳島毎日新聞』昭和 10 年 7 月 1 日）
・**新居格**「再び徳島に寄せる ― 国際観光の角度 ―」（『徳島毎日新聞』昭和 10 年 7 月 1 日）
・**佐藤春夫**「徳島見聞記」　（『東京朝日新聞』 昭和 10 年 7 月 1 日～5 日）
・花野富蔵（談話）「モ翁を偲ぶ座談会(6)」（『徳島毎日新聞』昭和 10 年 7 月 9 日）
※同紙面に佐藤春夫との談話も掲載
・**佐藤春夫**「モラエスの未刊詩」（『徳島毎日新聞』昭和 10 年 7 月 1 日）
・花野富蔵「モラエス素描　七年祭を迎へて」（『伝記』2(7) 伝記学会、昭和 10 年 7 月）
・花野富藏「モラエスと日本精神」（『セルパン = Le serpent』(53)、昭和 10 年 7 月）
・**正宗白鳥**「モラエスと魯迅」（『読売新聞』夕刊、昭和 10 年 7 月 20 日）
・**佐藤春夫**「文芸懇話会に就て ＝広津和郎君に寄す＝」（『東京日日新聞』 昭和 10 年 9 月 5 日～8 日）
・花野富藏「徳島日記　モラエス」（『セルパン = Le serpent』(55)、昭和 10 年 9 月）
**☆モラエス 著／花野富蔵 訳『徳島の盆踊』（第一書房、昭和 10 年 9 月）※発行は 10 日**
・**佐藤春夫**「日本文学雑感（そぞろごとを記して『徳島の盆踊』の訳者に寄す）」（『時事新報』昭和 10 年 9 月 30 日～10 月 2 日）

昭和 11 年〈1936〉

**☆モラエス 著／花野富蔵 訳『日本夜話』（第一書房、昭和 11 年 2 月）**

・花野富藏「モラエスの佛教觀」(『真理』2(4) 真理社、昭和 11 年 4 月)
・**佐藤春夫**『熊野路』(小山書店、昭和 11 年 4 月)
**☆モラエス 著／花野富藏 訳『おヨネと小春』(昭森社、昭和 11 年 6 月)**
・**菊池寛**「四国雑記」(『婦人公論』昭和 11 年 7 月)
＊四国歴訪講演会を文芸春秋社主催、徳島毎日新聞後援で開催。「文芸大講演会」(昭和 11 年 2 月 9 日)のため菊池の他、久米正雄、小島政二郎、大佛次郎、吉川英治、佐々木茂索、濱本浩ら七人の作家が高知から当日徳島駅に到着し講演を行った。
・**佐藤春夫**「山水おぼえ帳」(『文芸春秋』14 (8) 昭和 11 年 8 月〉
・花野富藏「第二の小泉八雲 モラエスの徳島」(『旅』13(9) 日本旅行倶楽部、昭和 11 年 9 月)

昭和 12 年〈1937〉

**☆モラエス 著／花野富藏 訳 『極東遊記』(中央公論社、昭和 12 年 4 月)**
・**新居格**「モラエスの遺書」(『東京朝日新聞』昭和 12 年 9 月 21 日～24 日)
＊『野雀は語る』(青年書房、昭和 16 年 7 月)に収録
・花野富藏「或日のモラエス」(花野富藏『日本人モラエス』モラエス友の会、昭和 12 年 10 月) ＊小説

昭和 14 年〈1939〉

・花野富藏「モラエスとヘルン」『日本文化時報』(54) 日本文化協会出版部、昭和 14 年 5 月)
・花野富藏「日本人モラエス」(『日本文化』(41) 日本文化協会、昭和 14 年 7 月)

昭和 15 年〈1940〉

・花野富藏『日本人モラエス』(青年書房、昭和 15 年 11 月)
＊『日本文化』掲載の「日本人モラエス」とは内容の構成、分量も異なる。
・**新居格**「モラエスの夜」(『街の哲学』青年書房、昭和 15 年 12 月〉

昭和 16 年〈1941〉

・**富士正晴** 詩「墓地の春」(詩雑誌『三人』(24) 昭和 16 年 3 月)
＊野間宏・富士正晴・井口浩『山繭』(明窗書房、昭和 23 年 1 月)に収録
・花野富藏『モラエスの日本精神』(ラジオ新書 69 日本放送出版協会、昭和 16 年 12 月)

昭和 17 年〈1942〉

**☆モラエス 著／花野富藏 訳『日本歴史 附 日本に於けるメンデス・ピント』(明治書房、昭和 17 年 2 月)**
・**佐藤惣之助**「徳島のモラエス」(『春すぎし』鶴書房、昭和 17 年 4 月)
**☆モラエス 著／花野富藏 訳『大日本 歴史・芸術・茶道』(帝国教育会出版部、昭和 17 年 5 月)**
・**吉井勇**「海南小記」(「モラエス」の章)(『相聞居随筆』甲鳥書林、昭和 17 年 5 月)

＊昭和 11 年に徳島来訪

**☆花野富藏訳「ヴェンセスラオ・デ・モラエス」（田部隆次編『日本を観る』青山出版社、昭和 17 年 7 月）**

**昭和 18 年〈1943〉**

・**三田華子**「旅人」（『文芸』11（1）昭和 18 年 1 月）　＊徳島出身の小説家

**昭和 19 年〈1944〉**

・**吉井勇**　「モラエス忌」（『玄冬』創元社、昭和 19 年 3 月）＊短歌十首

**（戦後）**

**昭和 23 年〈1948〉**

・**志賀直哉**「稲村雑談」（『作品』（1･夏～3･春号）昭和 23 年 8、11 月、昭和 24 年 3 月）

**昭和 29 年〈1954〉**

**☆モラエス 著／花野富蔵 訳『日本精神』河出新書 41（河出書房、昭和 29 年 5 月）**

＊鶴見俊輔（当時京都大学助教授）の斡旋で復刻。モラエスの「日本における教育」を補遺として追加。「解説」は戦後民主主義の形成に寄与した評論家・久野収

・花野富蔵「モラエスさん　ある警察官との挿話　1～14」（『徳島新聞』夕刊、昭和 29 年 6 月 25 日～7 月 5 日）＊小説

・花野富蔵「モラエスをしのぶ」（『朝日新聞』昭和 29 年 7 月 1 日）

**昭和 30 年〈1955〉**

・花野富蔵「モラエスさん ある尼僧との挿話①～⑩」（『徳島新聞』夕刊、昭和 30 年 6 月 24 日～7 月 8 日）＊智賢尼との交流を描いたもの（「あくまで小説」と付記）

**昭和 31 年〈1956〉**

・**佃實夫**「モラエスと日本文字」（『朝日新聞』昭和 36 年 5 月 29 日）

**昭和 33 年〈1958〉**

・花野富蔵『日本人モラエス―阿波の辺土に死去して三十年―』（『別冊週刊朝日』（26）、朝日新聞社、昭和 33 年 7 月）※「筆者は徳島在住、モラエスの伝記作家」という付記有

**昭和 34 年〈1959〉**

・**佃實夫**「ある異邦人の死」（『新日本文学』14（5）昭和 34〈1959〉年 5 月、『別冊 文芸春秋』(69)昭和 34〈1959〉年 9 月に再掲）

・**佃實夫**「毛唐の死」（『宝石』第 14 巻第 14 号、昭和 34 年 12 月）

※モラエスの死を推理小説風に書いたもの

**昭和 35 年〈1960〉**

・**正宗白鳥**「心の故郷」（『朝日新聞』昭和 35 年 1 月 4 日）

・**貴司山治**「徳島の昔と今（４）モラエス新論」（『徳島新聞』昭和 35 年 12 月 2 日）

※佃實夫の小説「毛唐の死」に触れ、モラエスはその死よりも「あの孤独な悲惨な生き方で、文学的素材となる人物だと思う」と述べている。

昭和 38 年〈1963〉

・花野富蔵「ヴェンセスラオ・デ・モラエスの人とその作品」(『熊本短大論集』(25)別冊 熊本短期大学、昭和 38 年 2 月)　※全集の翻訳に言及

・花野富蔵「ヴェンセスラオ・デ・モラエスの人と作品 ― 十九世紀末の長崎と神戸」(『熊本短大論集』(26)別冊 熊本短期大学、昭和 38 年 6 月)

・**志賀直哉**「盲亀浮木」(『新潮』60 (8) 昭和 38 年 8 月)

昭和 39 年〈1964〉

・**佃實夫**「異邦人モラエス 日本を愛したポルトガル人」(『朝日新聞』昭和 39 年 12 月 18 日)

・花野富蔵「日本に魅せられたモラエス　きょうの胸像除幕式によせて」(『読売新聞』夕刊、昭和 39 年 12 月 19 日)

昭和 40 年〈1965〉

・**中河与一**「徳島のモラエス」(『自由』第 7 巻 10 号 (自由社) 昭和 40 年 10 月)

昭和 41 年〈1966〉

・**佃實夫**『わがモラエス伝』(河出書房新社、昭和 41 年 10 月)

・**志賀直哉**「佃実夫『わがモラエス伝』推薦」(前出『わがモラエス伝』の帯の文章)

昭和 42 年〈1967〉

・**山口誓子**『方位　山口誓子句集』(春秋社、昭和 42 年 5 月)

※昭和 32 年、鳴門に行った際に詠んだ句　モラエスと小春とがゐて阿波霞む

昭和 43〈1968〉年

・伊藤整「ポルトガル大使館の話」(『朝日ＰＲ版』昭和 43 年 11 月)

昭和 44 年〈1969〉

**☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅰ』(集英社、昭和 44 年 3 月)** ※「解説」は井上靖

・**中野好夫**「伊賀町の異人さん」(『定本モラエス全集 月報 1』集英社、昭和 44 年 3 月)

＊花野富蔵にも言及

**☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅳ』(集英社、昭和 44 年 4 月)** ※「解説」鶴見俊輔

**☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅱ』(集英社、昭和 44 年 5 月)** ※「解説」遠藤周作

・**大佛次郎**「モラエスの蛍」(『定本モラエス全集 月報 2』集英社、昭和 44 年 5 月)

**☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅲ』(集英社、昭和 44 年 6 月)**

※「解説」アルマンド・マルチンス・ジャネイロ (駐日ポルトガル大使)

**☆花野富蔵 訳『定本モラエス全集Ⅴ』(集英社、昭和 44 年 7 月)**

※「解説」佃實夫／「モラエス小伝」花野富蔵

・**獅子文六**「モラエスと阿波女」(『定本モラエス全集 月報 5』集英社、昭和 44 年 7 月)

[1] ギリシャ生まれの新聞記者、英語教師、英文学者、随筆家。渡米して新聞記者をしていたが、日本文化に関心を持ち来日。松江の中学校に英語教師として赴任し、小泉セツと結婚。熊本・第五高等学校の教師、英字新聞『神戸クロニクル』の記者を経て、明治 29〈1896〉年に帰化して小泉八雲と名乗る。その後東京帝国大学の講師として英文学を講じた。主な著作として『知られざる日本の面影』『怪談』（原著は英語）等がある。

[2] 『令和 3 年度総合科学部創生研究 プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書異文化に照らし出された四国 ～「グローカル」な観点からの文献調査から～』令和 4〈2022〉年 3 月、徳島大学総合科学部）に掲載。

[3] 『令和 2 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書異文化に照らし出された四国～グローカルな視点からの地域文化に関する文献調査から～』令和 3〈2021〉年 3 月、徳島大学総合科学部）に掲載。

[4] 正宗白鳥の経歴に関しては、後藤亮『正宗白鳥 文学と生涯』（思潮社、昭和 41〈1966〉年 7 月）、兵藤正之助『正宗白鳥論』勁草書房（昭和 43〈1968〉年 12 月）、大嶋仁『正宗白鳥―何云つてやがるんだ―』（ミネルヴァ書房、平成 16 年〈2004〉年 10 月）等参照。

[5] 『昭和文学全集　第二巻　島崎藤村・徳田秋声・泉鏡花・正宗白鳥』小学館、昭和 63〈1988〉年 1 月、967 頁。

[6] 日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』第三巻、講談社、昭和 53〈1978〉年 1 月、234 頁。

[7] 『昭和文学全集　第二巻　島崎藤村・徳田秋声・泉鏡花・正宗白鳥』前出、968 頁。

[8] 「モラエスと魯迅」では、ハーンやモラエスのように現実を無視して自分の夢に耽っていられる文学者は「幸ひ」だが、自己の周囲の現実を直視しないではいられない魯迅のような作家は「不幸」だというように対比した形で書かれている。

[9] 『正宗白鳥全集』第 22 巻、福武書店、昭和 60〈1985〉年 4 月、248 頁～249 頁。

[10] 『読売新聞』昭和 10〈1935〉年 6 月 30 日記事「日本文化の貢献者　モラエス七回忌」。

[11] 『国際評論』昭和 8〈1933〉年 9 月、日本外事協会、78 頁。

[12] 『正宗白鳥全集』第 29 巻、福武書店、昭和 59〈1984〉年 3 月、413 頁。

[13] 『正宗白鳥全集』第 30 巻、福武書店、昭和 61〈1986〉年 10 月、334 頁。

[14] 『別冊 週刊朝日』朝日新聞社、昭和 33〈1958〉年 7 月、148 頁。

[15] 『徳島新聞』昭和 35〈1960〉年 1 月 11 日記事「本県観光の長所・盲点① 徳島をこきおろす正宗白鳥」では、徳島市観光課側の反応として「戦前の徳島を知っている人だったら、正宗氏のように徳島のことをそうこきおろしはしないだろう」と書かれている。

[16] 『正宗白鳥全集』第 29 巻、前出、413 頁～414 頁。

[17] 詩の全文は土岐善麿『新訳杜甫詩選』（春秋社、昭和 30〈1955〉年 11 月）160 頁を参照。内容に関しては竹村則行「「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷（上）」（九州大学中国文学会編『中国文学論集』平成 7 年〈1995〉年 12 月）を参照、19 頁。

[18] 『正宗白鳥全集』第 27 巻、福武書店、昭和 60〈1985〉年 6 月、207 頁、209 頁。

[19] 『正宗白鳥全集』第 29 巻、前出、518 頁。全集の解題（紅野敏郎）によれば「遊行記」の初出掲載紙は不明だが、昭和 34〈1959〉年 12 月頃に書かれている可能性が強い。

[20] 『正宗白鳥全集』第 29 巻、前出、414 頁。

[21] 『正宗白鳥全集』第 29 巻、前出、244 頁。

[22] 『志賀直哉全集』第 10 巻、岩波書店、平成 11〈1999〉年 9 月、270 頁。

[23] 全集の編集委員は志賀直哉を筆頭に井上靖、遠藤周作、A・マルチンス、佃實夫。五人の編集委員の連名で『定本モラエス全集 第一巻　月報』（集英社、昭和 44〈1969〉年 3 月）には「一つの紙碑を――編集のことば――」が掲載されている。志賀がこの全集刊行に関して言及したものは見当たらない。全集刊行時、志賀は 86 歳であり体調がすぐれぬ時も多かったから、実質的な編集業務には携わっていないだろう。自著の推薦文を書いてもらった佃が志賀に編集委員として連名してもらうよう依頼した可能性が強い。

[24]『定本織田作之助全集』第 8 巻、文泉堂書店、昭和 51〈1976〉年 4 月、121 頁。
[25] 阿川弘之『志賀直哉 上』前出、406 頁～407 頁。志賀の経歴については『志賀直哉全集』第 22 巻（岩波書店、平成 13〈2001〉年 3 月）収録の年譜と阿川の『志賀直哉 上』及びその下巻（平成 6〈1994〉年 7 月）を参照。
[26]『志賀直哉全集』第 10 巻、岩波書店、平成 11〈1999 年〉年 9 月、19 頁。
[27]『志賀直哉全集』第 10 巻、前出、17 頁。当時の志賀の日記でも、昭和 9〈1934〉年 12 月 4 日夜 10 時に大阪から船で徳島に向かい、10 日に大阪に戻ってきた旅の道中が確認できる（『志賀直哉全集』第 14 巻、岩波書店、平成 12〈2000〉年 3 月、132 頁～133 頁）。
[28]『伝記』前出、91 頁。引用中の「日本での生活」は『定本モラエス全集Ⅲ』（集英社、昭和 44 年 6 月）では『日本通信Ⅲ　日本生活』(A vida　Japoneza. Terceira serie de cartas do cartas do Japão(1905-1906)　Livraria Chardron, de Lello e Irmão, Porto. 1906) と訳されている。
[29]『志賀直哉全集』第 8 巻、岩波書店、平成 11〈1999 年〉年 7 月、166 頁。志賀は「書き初めた頃」（『文学の世界』昭和 23〈1948〉年 5 月）でも「僕達は図書館にヘルンの本を総て買はし」「僕自身でもその後丸善に誂えてそれらを取寄せた」（『志賀直哉全集』第 8 巻、前出、234 頁）と述懐している。
[30]『志賀直哉全集』第 8 巻、前出、191 頁。
[31]「盲亀浮木」は三つの話「軽石」「モラエス」「クマ」と最後の「一体それはなんだらう」で構成される。随筆か小説か区別しにくい身辺雑記的な作品だが、昭和 48〈1973〉年 10 月刊行（岩波書店）『志賀直哉全集』第四巻でも小説の部類に入っている。
[32]『志賀直哉全集』第 10 巻、前出、20 頁～21 頁。
[33]『志賀直哉全集』第 10 巻、前出、19 頁。
[34]『志賀直哉全集』第 10 巻、前出、34 頁。
[35]『志賀直哉全集』第 10 巻、前出、36 頁。
[36]『志賀直哉全集』第 10 巻、前出、36 頁。
[37]『志賀直哉全集』第 10 巻、前出、36 頁。
[38]「盲亀浮木」について、古田紹欽・他監修『仏教大事典』（小学館、昭和 63〈1988〉年 7 月）では「大海を泳ぐ盲目の亀が、漂い浮かぶ木と出会うことをいう。きわめてまれなこと。人間として生まれること、および仏法を聞くことの困難さを例えたもの」（977 頁）と解説されている。志賀は昭和 38〈1963〉年 7 月 30 日付の三上秀吉宛書簡で「阿含経の中の仏陀と阿難の問答で、あり得べからざざる偶然云々と僕の書いたものよりももつと複雑なもの」だが「よく分からないので簡単なものにし」た（『志賀直哉全集』第 21 巻、岩波書店、平成 12〈2000〉年 11 月、317 頁）と記している。
[39] 岡村多希子「戦前におけるモラエス顕彰」（『東京外国語大学論集』平成 3〈1991〉年 3 月）183 頁。
[40]「一つの紙碑を――編集のことば――」前出、1 頁。
[41]「一つの紙碑を――編集のことば――」前出、2、3 頁。
[42] 花野の『日本人モラエス』（青年書房、昭和 15〈1940〉年 11 月、301 頁）では「日本生活に没入して「日本精神」の醍醐を味到し」「著書を通じて万邦無比であるわが国体の精華を海外に宣揚した恩人」として「日本人モラエス」の功績を意義づけようとした。戦後は「日本人モラエス――阿波の辺土に死去して三十年――」（前出、149 頁）で「モラエスは庶民を愛した。彼は日本人と同じものを食べていた」と書くように、モラエスの庶民的な面を強調した書き方になっている。
[43] 花野富蔵訳『徳島の盆踊』前出、344 頁～345 頁。